

ヤコブの手紙1章「試練の中のみことば」

1A あいさつ 1

1B ヤコブ

2B 十二部族

2A 試練の中にある信仰 2-18

1B 忍耐による成熟 2-4

2B 惜しみなく与えられる知恵 5-8

3B まことの富 9-11

4B 自分の欲からくる誘惑 12-15

5B 良きものだけを賜る神 16-18

3A みことばの実践 19-27

1B 聞くに早い者 19-21

2B 聞くだけではない者 22-25

3B まことの宗教心 26-27

本文

ヤコブの手紙をこれから読んでいきます。早速、中身に入っていきます。

1A あいさつ 1

¹神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、離散している十二部族にあいさつを送ります。

ヤコブが、「十二部族にあいさつ」つまり、ユダヤ人の信者に対して手紙を送っています。ヤコブの手紙は、ヘブル人への手紙のテーマが重なる内容です。それは、「信仰が試される」ということでもあります。ヘブル書で、著者は、ユダヤ人で迫害を受けていた信者たちが、それでも神の約束にしがみついて忍耐することによって、救いを達成することを教えていました。そしてその忍耐は、自分の内で聖めとなり、義という平安の実を結ぶと教えていました。つまり、霊的成熟へと向かわしめます。このテーマを、ヤコブは話していきます。

1B ヤコブ

書いているヤコブは、イエス様の兄弟のヤコブです。新約聖書には、主に二人のヤコブが出てきますが、一人は、十二弟子の一人、ゼベダイの子で、ヨハネの兄弟であるヤコブがいます。彼は、ヘロデ・アグリッパ一世によって殺され、殉教しました(使徒 12:2)。この手紙のヤコブは、十二弟子のヤコブではなく、イエス様の半兄弟のヤコブです。半兄弟と言っているのは、イエス様は、聖霊によってマリアがみごもっていて、ヨセフとの血のつながりをイエス様が持っていないからです。

しかし、ヨセフは、マリアがイエスを出産した後は、夫婦関係の中で息子、娘を生んでいきました。ナザレの会堂の者たちが、イエスを見て、「マタ 13:55 この人は大工の息子ではないか。母はマリアといい、弟たちはヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。」と言いました。

これら肉の兄弟たちは、初めイエスを信じていなかったことを、ヨハネは書き記しています(ヨハネ 7:5)。けれども、主が復活されて、ヤコブに直接、現われてくださったようです。パウロは、コリント人への手紙に、「I コリ 15:7 その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。」と書いています。ヤコブはこの時から信者になり、またキリストの弟子となりました。

そして、十二使徒の一人ヤコブが殉教してから、おそらく、主の兄弟のヤコブが教会の指導的役割を果たしたのではないかと考えます。天使によって牢屋から出たペテロが、マルコの母の家にいる人々に対して「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください(使徒 12:17)」と言っているからです。そして、エルサレムにある教会で、パウロとバルナバが割礼を受けてモーセの律法を守るから救われると言った者たちと激しい議論になり、それを使徒ペテロが立ち上がって信仰による救いを語りました。それからヤコブが立ち上がって、聖霊と教会によって異邦人を悩ましてはいけないという判断を下しました。ヤコブが、エルサレムにおける教会の指導者となっていました。このことはパウロも認めており、ガラテヤ 2 章 9 節で、エルサレムにいる主だったとみなされている人たちとして、ペテロ、ヨハネ、そしてヤコブの名を挙げています。

そして使徒 21 章で、エルサレムにやって来たパウロを大きく受け入れ、けれどもパウロが律法を破るようにユダヤ人に話しているという謂れなき噂が立っているから、神殿で儀式を守るのを見せましようとして助言しています。したがって、ヤコブはユダヤ教、殊にパリサイ派のユダヤ人が数多くイエスを信じていった中で、彼らに牧会していた指導者でありました。

そして聖書にはありませんが、ヨセフスによるとヤコブは、大祭司の命令によって紀元後 62 年に石打ちで殺されています。ローマ総督がフェストゥスから新しく代わろうとする時に、アンナスの息子アナヌス(Ananus)が、ヤコブが律法に背いていると言って彼を処刑するよう命じたとのこと。ヨセフスは自身パリサイ派であったにも関わらず、この処刑を好ましく思っておらず、このせいで 70 年にエルサレムが破壊したとまで述べました。ヤコブはそれだけ正しく、聖い人で、多くの者たちから敬われていたようです。

ところで、この手紙には、山上の説教が色濃く反映しています。試練をこの上もない喜びとみなしなさい、という言葉が出てきますが、迫害を受けたら大いに喜びなさいとイエスが言われた言葉が反映されています。完全な者となるという約束もありました。知恵を求めなさいという勧めは、「求めなさい、そうすれば与えられます」という御言葉の反映です。兄弟をさばいてはいけない、という言葉もでてきますが、イエス様が「さばいてはいけない、さばかれなさい」と言われた言

葉がありますね。ヤコブは未信者であった時も、これらの言葉を聞いていたのではないか？と思います。そして、彼は、イエスを主としてからは、本気で、その教えに従っていったのでしょ

そして、その彼が、自分のことを「神と主イエス・キリストのしもべ」と言っています。「しもべ」のギリシア語はデューロスであり、奴隷、しかも最下位の奴隷です。イエス様の半兄弟なのですから、ヤコブはそれを自分の呼び名に持ってきてよかったのです、「イエスの兄弟ヤコブから」といように。しかし、ただ、主のしもべと呼んでいるのです。同じように、イエス様の半兄弟ユダは、「ユダの手紙」をかきのこしていますが、「イエス・キリストのしもべ(1節)」とのみ書き記しています。自分を持ち上げず、主の前でへりくだっているのです。そして、主のしもべということほど、栄誉ある位置はないですね。

2B 十二部族

そして、「離散している十二部族」と言っていますが、ヤコブは、エルサレムやユダヤ以外の、世界に離散しているユダヤ人信者にこの手紙を書いています。

ところで、ヤコブが生きていた時代に、イスラエル十二部族が存在していたのは興味深いです。キリスト教会の中ではやっている、「失われたイスラエル十部族」という説があります。それは、アッシリア帝国が北イスラエルを滅ぼしたときに、捕え移された十部族は、歴史の中で消えて行ってしまった、というものです。そして、日本人がその失われた部族であるかもしれないとか、果てしない迷宮入りの議論をしている人たちがいます。しかしアッシリアに捕え移されたのは、一部であり、多くの、神を信じていた人々は南ユダに移り住んでいました。彼らは、ユダの人とともにバビロンに捕え移され、またユダ族とともに、バビロンからエルサレムに帰還しています。そして、ヤコブが生きていた時には、だれがどの部族であるか、その区別が付いていたことが分かります。

2A 試練の中にある信仰 2-18

1B 忍耐による成熟 2-4

²私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。

先ほど話しましたように、試練に耐え忍ぶことがヤコブ書全体で背後にある教えになっています。困難を耐え忍び、魂が練り清められる中で成熟へと向かいます。「この上もない喜び」と言っています。どういことでしょうか？到底、喜びなどと思えません。ヘブル書 12 章で学びました、「12:11 すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。」当然、その時は悲しいのです。しかし、このことによって訓練を受けて、義と平安の実を結ばせることができるという将来を見ることができます。だから喜ぶことができます。神の良い目的があるからです。

同じように、迫害下にいたユダヤ人信者に書かれたと言われているペテロ第一の手紙にも、冒頭でこうあります。「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいますが、いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。(1ペテロ 1:6-7)」

³ あなたがたが知っているとおりに、信仰が試されると忍耐が生まれます。⁴ その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。

「信仰が試される」とあります。これは、学校の先生が、生徒の学習度を知るために、試験を課すのようなものではありません。神が、私たちの信仰を知るために試されるわけではありません。その逆です、私たちが神を信じているところに立っているかどうか、私たち自身が自分の心を知るためです。神は、すでに私たちの心のうちにあるのご存じです。私たちが、神により頼んでいるかどうか、私たちが試練を通して知ることになります。

そして信仰が試されると、「忍耐が生じる」とあります。ヘブル書では、このことが強調されていました。初めに信じた確信を、最後まで保っているのに必要なのは、忍耐であることを教えていました。そして大事なのは、積極的に「忍耐を完全に働かせなさい」ということです。試練の時こそ、信仰が発揮されます。目に見えないものを信じるのが、信仰ですから。そして、その信じるということを、たとえ逆境であっても、働かせるのです。それが忍耐であり、忍耐をしっかりと働かせます。

そして、「何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります」と言っていますね。「完全な者」とは、完熟したと言いかえると分かり易いでしょう。全き、成熟に向かう、ということでもあります。私たちはすでに、恵みによって全き者になっています。「コロ 2:10 あなたがたは、キリストにあって満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。」しかし、私たちは、そのキリストにより頼まずに、自分自身により頼んでいる部分が多いです。しかし、試練に遭うと、キリストに信頼するようになります。そこで、この方にある十全、満たされているということを、自分が知るようになってくるのです。

2B 惜しみなく与えられる知恵 5-8

ところで、ヤコブの手紙を読んでいると、一つ一つが関連のない格言のように思えるかもしれません。けれども、よく見ると、一つの教えから次の教えにつながって、流れているのが分かります。

⁵ あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。

私たちは、「知恵」と聞きますと、上手に何かやりくりする手法のように聞こえます。間違いです、試練に会うとき、その中でなおのこと、神のみこころを行なう知恵であります。キリストの似姿にある知恵と言ったらよいでしょう。例えば、敵が自分たちの前にいたら、私たちは争わないといけな
いと思ってしまう。けれども、イエス様は、敵を愛しなさい、敵のために祈りなさいと言われま
した。それを行うのには、自分自身には何も無いことを知りますね。だから、神に求めるのです。

昨年、私は、あるクリスチャン議員と他の二人とエルサレムに行きました。その時に、街中でパ
レードがありました。歩いてホテルに帰ろうとしていると、どんどんバリケードができていきました。
次々と、遠回りを指示されているうちに、私は嫌な予感がしました。ホテルそのものが、バリケード
に取り囲まれて、中に入れないのでは？ということです。予感的中しました。目の前にホテルが
あるのに、バリケードが敷かれているのです。私は、中に入れろと若い警官に突っかかりました。
なんと、その人の腕をつかんでいたのです！銃を持っているのに、危なかったです。

その日は、その議員と別行動だったのですが、彼もやはり、バリケードで誘導されて私たちと同
じ地点にやってきました。事情を彼に話すと、「これは、面白いことになった！」と、逆に興奮し始め
たのです。私は落胆と怒りで満たされたのに、彼は楽しんでいました。そして、全く同じ警官に、話
しかけました。すると、すんなりとバリケードが取り除けられました！おそらく、上からの連絡で、ホ
テル宿泊客には開けるように指令が来たのでしょう。ここに、知恵がありますね。彼は、今の逆境
も、主が造ってくださっているということを信じていたのです。そして、その信仰に、キリストにある
態度が現れます。余裕があり、優しさがありますね。これが、キリストにある知恵です。

神が、どのような方であるかをヤコブは教えています。「だれにでも惜しみなく、とがめることなく
与えてくださる」と言われていますね。私たちは、試練の時に、自分たちには、その問題を打開す
る方法や力が何も無いことを知ります。自分たちの知恵や力では、どうにもできません。その時に
こそ、私たちは、惜しみなく、とがめることなく与えてくださる方を知ることができます。主は、願い、
求める者を快く、受け入れてくださっているのです。そうすることによって、ご自身の気前の良さ、
恵みの豊かさを知らせることができるからです。

⁶ ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のよう
です。⁷ その人は、主から何かをいただけたらと思っただけで、⁸ そういう人は二心を抱く者で、
歩む道すべてにおいて心が定まっていなからです。

願い求める時にも、信仰をしっかり働かせないといけないということです。相手への信頼がなく願
っていれば、それは要求であって、自分の意志を相手に押し付けているだけです。疑って求めて
いれば、祈りの意味と目的を間違っています。信頼とへりくだりがなければ、自分の願いを神に合
わせてもらうために祈っていることとなります。祈りが聞かれなければ、あなたは要りませんとなり、

まるでお店にクレームをつける客のように、見下すことになります。

願い求めは、神に対する信頼が深めていく過程です。その交わりを深めていく過程です。願い求めが自己目的化してはいけません。それをヤコブは、疑っている人、二心になっている人にとえています。条件付きで神を信じていると言ったらよいでしょうか。祈りが聞かれているように見えない時は信じないで、聞かれているように見える時だけ信じます。

そういった人の生活は、ここにあるように、海の大波のように揺らぎます。霊的な成熟の大きな特徴は、揺るがないことです、安定していることです。変わる事のない神に信頼していて、その希望は、たましいの錨となっています。「ヘブル 6:19 私たちが持っているこの希望は、安全で確かな、たましいの錨のようなものであり、また幕の内側にまで入って行くものです。」

3B まことの富 9-11

⁹ 身分の低い兄弟は、自分が高められることを誇りとしなさい。¹⁰ 富んでいる人は、自分が低くされることを誇りとしなさい。富んでいる人は草の花のように過ぎ去って行くのです。¹¹ 太陽が昇って炎熱をもたらすと、草を枯らします。すると花は落ち、美しい姿は失われます。そのように、富んでいる人も旅路の途中で消えて行くのです。

試練や困難として大きなものの一つは、経済的なことです。富があればそれだけ安定して、生活や人生が安泰しますから、私たちは後者を普通に求めます。迫害を受けていた、ユダヤ人信者たちも、経済的な困窮が差し迫った問題でした。当時は、ローマ社会です。貧富の差は、日本とは比べ物になりません。ですから、今でいう「勝ち組」、富を求めるほうに大きな誘惑がありました。

私たちは、絶えずこの誘惑を受けます。イエス様が言われたように、神と富の二つに仕えることはできません。自分が、主に経済的必要を信頼せずに、少しでも富のほうに信頼して動くと、どんどん神から離れていきます。富に支配されることは実に簡単にできますが、富を管理すること、支配することは、相当の、神への信頼が必要です。

そこで、ヤコブがここで話しているのは、「身分の低い兄弟」は、信仰によって高められることなのです。経済的な不安から出てくる、自尊心の低さがありますが、信仰の世界では真逆です。信じる者には、神の子どもとなる身分が与えられます。キリストにあつて、神の相続人となります。世におけるあらゆる金持ちよりも、はるかに豊かな者となります。そして、この霊的真理は、身分の低い時にこそ、信仰によって体感できるのです。

そして、富んでいる人については、自分が神の前では、何でもない人であることを知る時に、幸いを得るのです。イエス様は、心の貧しい者は幸いです、と言われたようにです。富に自分の尊厳

を置いている時に、どれだけ自分が不幸であるか、キリストを知った人々は実感しています。その富というのが、地上の富については、ちょうど草の花のような、はかないものだからです。イスラエルでは、草の花のはかなさが際立っています。岩地に種を蒔くとえにあるように、土が浅いのですぐに芽を出しますが、日差しが強いので枯れてしまいます。その美しさは、はかないのです。

4B 自分の欲からくる誘惑 12-15

¹² 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けるからです。

再びヤコブは、試練に耐えることについて語っています。ここでは、耐えることの幸いを説明しています。先ほどは、忍耐を働かせることによって、神にのみ、自分の力や知恵があることを知る、完全な人になれることを話していました。こちらは、将来の希望です。耐え抜いた先には、いのちの冠を受けると言われています。

いのちの冠については、激しい迫害を受けていたスミルナの教会に対して、イエス様が約束しておられました。「黙 2:10 あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」自分のいのちが取られそうな時に、主は殉教の報いとして、永遠のいのちの冠を与えるというものです。もちろん、それは肉体的ないのちに代わる、いのちの冠だけでなく、生活全般における安心感を意味する、いのちも含まれるでしょう。イエス様が言われました、「マタ 16:25 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。」

¹³ だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言っははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。¹⁴ 人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。¹⁵ そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。

実は、試練と誘惑は、同じギリシア語(ペirasmos πειρασμός)になっています。主は、私たちの信仰を試みられる方ですが、悪を行うようにそそのかす、誘惑を与える方ではありません。また、神ご自身が悪に誘惑されることはなく、誘惑とは無縁の方です。神ではなく悪魔が誘惑者ですね。

人が、苦しみや迫害を受けている時に、それは主の深い御旨があつて、許されていることなのだというのは、正しい信仰です。しかし、自分が誘惑を受けて、悪に屈することは、神から出たことではないのです。「私は、こんなにひどい目にあつたから、こんなことをしているが、それは仕方がないことだ。」と、あたかも自分自身に責任がないようにみなすのは、間違っています。あたかも、神

が自分をこのようにしたのだと考えるのは、間違っているのです。

誘惑を受けること自体は、悪ではありません。イエスご自身が悪魔から誘惑を受けました。けれども、誘惑に屈する時が、悪であり、罪です。誘惑を受けている時に、悪魔が刺激するのは、私たちの肉欲なのです。ヤコブはそれを、まるで子が母の胎から生まれ出るように表現しています。しかも、生まれた後、すぐに死産になるように描いています。私たちがどれだけ、罪について深刻にとらえているか、いつも考えないといけませんね。罪は、死をもたらすということを真剣にとらえているか？ということです。そんなことはないかと軽々とらえると、自分を欺いてしまっています。

5B 良きものだけを賜る神 16-18

¹⁶ 私の愛する兄弟たち、思い違いをはいけません。¹⁷ すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです。父には、移り変わりや、天体の運行によって生じる影のようなものはありません。

試練を受けていると、私たちはどうしても、神が悪をもたらしているように思ってしまう。けれども、すべての良きものは神から来ており、神は変わることなく良きものを、完全なものを、天からくださっています。悪魔が何とかして私たちを滅ぼそうとしていますが、彼が行うのは、神に対する名誉棄損です。つまり、神は意地悪な存在で、不公正で、行き当たりばったりで、自分の気分次第で行動しているように、見せることです。

父なる神に、移り変わりがない、影のようなものではないと強調しています。それは、調子のよい時は、主は良いお方だと思えるのですが、何か気分を変えて、今は悪を自分にもたらしていると思ってしまうからです。自分に試練があっても、主は決して悪いことをされているのではなく、変わらずに良いお方であり、天からの賜物を下さるのです。

¹⁸ この父が私たちを、いわば被造物の初穂にするために、みこころのままに真理のこぼれをもって生んでくださいました。

ヤコブが今、神を父として強調しているのは、私たちが、イエスを信じたことによって、神の子どもになっていることです。父ですから、私たちに悪いものを与えるはずがないということです。イエス様が、求めなさいと勧められた時に、子が魚が欲しいと言っているのに、父が蛇を与えるはずがないことを語られました(ルカ 11:11)。

そして、私たちがどのようにして、神の子どもになったかは、ここにあるように、「みこころのままに真理のこぼれをもって生んでくださいました」と言っています。ペテロも第一の手紙で、「1:23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも

残る、神のことばによるのです。」ちょうどこれは、子種によって、母の胎の卵子と受精し、胎児となるように、神のことばという種によって、霊的に私たちが神から生まれるということです。

3A みことばの実践 19-27

1B 聞くに早い者 19-21

¹⁹ 私の愛する兄弟たち、このことをわきまえていなさい。人はだれでも、聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありません。²⁰ 人の怒りは神の義を実現しないのです。²¹ ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

神のみことばによって生まれたのだから、そのみことばを素直に受け入れて、それで魂が救われる、つまり、神の救いの完成が自分のうちで達成されるようにしなさいということです。

しかし、その過程で、私たちは怒りという課題があります。試練には、不条理な目にあいます。迫害において、悪に面します。すると、悪に対して悪で返して、自分自身が悪に加担してしまうこととなります。そこで大事なことは、自分の怒りは神の義を達成しないということです。神の大きな御旨の中で、その試練は許されているのです。神の義は、私たちの義よりも、はるかに高いところにあります。それが分かるわけがないのに、これこそが正しいことなのだとせつかちになって、怒ります。しかし、それで神の義を達成していないのです。

どうして怒ってしまうのか？もちろん、主によって怒ることはあります。しかし、私たちが正しい錨を持つ時、判断する時は、よく聞かないといけません。いろいろなことを聞いて、それでもって、主を恐れながら、一つの判断を下します。そこには、自分の自尊心が傷つけられたというような、自己中心的な思いはありません。ですから、まず自分を横に置いておいて、それから、正しいと思われることを語ります。それが、聞くのに早く、語るのに遅くなりなさいということです。

ある人が、「物事には、ファクターX がある」とよく言います。自分の知るところでは、あまりにも、ひどいことが起こっているように見える。そして早まって怒ることがある。けれども、そのファクターX、死角に入っていた事実を知ったら、今まで黒だと思っていたことが、実は白だった。いや、黒でもなく、白でもなく、実は紫だったというようなことが起こるのです。

ですから、私たちが、神の義ではない自分の怒りによって、むしろ心に悪を迎え入れてしまい、心を汚してしまうことがあります。アブサロムのことを思い出します。彼は、自分の妹タマルが、異母兄弟のアムノンに凌辱されたことを知り、怒り、苦みを抱きました。アムノンを殺しました。そして父ダビデにも、怒りと憎しみの矛先が行きます。そしてついに、アブサロムは父の王位を奪い取ります。そこではすでに、怒りや憎しみがあっても、やっていることは、単なるうぬぼれでしかなかったのだ

す。このように、怒りによって義を達成しようと思っても、汚れと悪に満たされてしまいます。

そして、そういった汚れを捨てて、みことばを素直に受け入れて、心にみことばが植え付けられることによって、神の義を求めていきます。

2B 聞くだけではない者 22-25

そこで、次の言葉です。午前礼拝で学びました。

²² みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。²³ みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で眺める人のようです。²⁴ 眺めても、そこを離れると、自分がどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。²⁵ しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて、それから離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。

素直にみことばを聞いて、心に植えられて、受け入れていく中で、それが自分のうちで育っていく過程が必要です。霊的に成長して、実を結ばせることが必要です。苦しみや試練の中で、なぜ私たちが霊的に成長するのかと言えば、試練の中だからこそ、自分のうちに何も頼れる者がいないことを知っていて、それで、みことばにしがみついて生きていこうとするからです。みことばは、ただ聞くだけでなく、それをしっかりと心に留めて、行いに現れてくるものなのです。

そこで、具体的に、いつも鏡を見ている人に、みことばを行う人たちを喩えています。ちょうど女性が外に出てトイレでも、電車の中でもお化粧直しをしているのと似ています。自分の心に植え付けられたみことばを、自分の生活の中でどう生かされていくのかを、よく考えることです。そして、そこで、みことばを当てはめることができているかどうか、確かめることです。

3B まことの宗教心 26-27

そして、みことばを行っていくことについて、具体的なことを教えます。

²⁶ 自分は宗教心にあついても、自分の舌を制御せず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。²⁷ 父である神の御前できよく汚れのない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、この世の汚れに染まらないよう自分を守ることです。

ここで、真実な信仰の姿と、単なる宗教の姿の違いを教えています。私たちはしばしば、信仰的であると思ってしまう人たちが、実は全くそうではないことに気づくことがあります。全く信仰的ではない、肉的、世的なのに、だまされてしまうのは、その人の言っている言葉が正しかったりするときです。しかし、それは欺いているのです。

三つのことを、主に語っています。一つは、自分の舌を制御できていないということ。知恵あること、正しいことを言っているようで、それがねたみや悪意から来ていることがしばしばあります。言い争いになっている時に、それは自分が義を伝えているからだ、という言い訳をしますが、実は、そうではありません。自分を欺いています。

次に、孤児ややもめを助けていないことです。口では、愛しているといいながら、真実に、行いによって示していないということです。しかし、神を信じているという者は、行いによってその信仰が生きていることを示します。そして、最後に、自分が世の汚れで染まらないことです。

この三つのことが、これからヤコブの手紙の中でも、三つの主張となっていきます。一つが、貧しい人々、困っている人々に手を差し伸べること。次に、口で汚れをもたないということ。言い争いも、ここでは汚れに入ります。そして、三つ目に、世の汚れに手をつけないということです。

このようにして、試練を受けていても、私たちは、善を行う自由が与えられています。一つの証しを紹介します。それは、ローマで疫病がはやったときです。疫病に対して、人々の多くが死んでいきます。彼らは何かに呪われたとみなされ、みな逃げました。その時に、キリスト者は自分が感染する危険を負いながらも、看病に徹しました。復活の希望があったので、死を恐れなかったのです。しばらくたって、疫病が収まっていきました。ローマの町には、逃げようもない、弱まった人たちだけが残っていました。そして、その人たちは、ほとんどがキリスト者になっていたということです。

試練の時にこそ、私たちはキリストの愛を実践できます。人々が恐れることを、私たちはこの方の愛によって恐れず、善をたゆまず、行っていくことです。